（3）三女の困窮《ヤエコエレ婆、ヒシルエ婆、ヤエレシカレ女の子》[1]

西*場所なる石狩の川すじなるイシヤン[2]といへるは、其*運上屋を出て凡八日路も川船にて上ることなりける深山に村落なせる地なるが、爰に住みしものにて名はヤエコエレと云て行年当巳のとし[3]は七十八九歳のよし。左りの眼一方は山へ入りて薪樵りける時に大なる木の枝朽て落来り、是に刺たりて[4]盲したりとかや。腰も二重に屈まりて一歩といへども杖に助かりてならで行ことなり難きよしなるが、此婆に二人の娘有。其姉娘をばペラトルカと呼びなし、其妹のかたはシトルンカといへるよしなるが、其ペラトルカの方へはシロサンといへる聟を取り、シトルンカの方へはヤイサキ[5]といへる聟を娶て、其中に男子五人《ラクンテ、サイカヲツカ、カネカウシ、ドバト、ヨウカクシ》をもふけていとも中睦じく居しけるが、此ペラトルカといへるへ*番人寅松といへるもの恋したひ、さまざまの無利不法[6]等を申懸て夫シロサンは遠き漁場へ遣し、妻ペラトルカは己れが行べき漁場へ連行、終に是を姪して[7]夫妻の中を隔てしかば、其ペラトルカも詮方なく寅松に従ひ侍り有けるに、シロサンも今は如何ともなし難しと其念をぞ絶ちたりしが、それよりも最早五年とかになるよしなるに、其妾を一度も故郷へ帰し遣はさずとかや。また其妹なるシトルンカ

---

1 『丁巳日誌』（上、207、218-219、237-239、354、404）に三女について詳細な記述がある。

2 現・深川市一巳（いちゃん）地区。

3 安政四年（1857）。行年は年齢のこと。

4 自筆本は「刺たりて」。文脈から「あたりて」と読んでおく。

5 『丁巳日誌』（上、218）に拠ればヤイサキは娘シトルンカの夫ではなく、孫ラクンテの妻で、シトルンカの夫はエナオカントリとある。（『丁巳日誌』の他の箇所もこの人名に一致する）。なお松浦武四郎選集（4、181）所収の石狩十三場所シノロ人別にもイナオカントリ 33 才、妻シトルンカ 30 才とある。

6 正しくは「 無理不法」。道理にたがい、人倫に反すること。

7 底本は「強して」。石水本に従う。

夫婦のものも浜[8]に下げて*雇(ヤトイ)といへることをなさしめ置(おき)、是も数十年の間[9]故郷へも帰さず、一度として老(おい)の見舞に遣(や)りもせず、矧(いはん)や五人の子供等も今は何(いづ)れも年長じて漁業の*稼(かせぎ)また木伐(きこり)等も出来侍るが、是をだにも、祖母の郷(さと)へ一度と、支配人へ願ひ出(いでさうらふ)候やいたく罵(ののし)り、稼業の出来ざる老婆等山に有るまゝ何のその、見舞に行(ゆく)ことも何も有るべし、山に居らば山にて自(みづから)が気侭に一生を送りて死(くたばり)[10]仕舞えかしとて叱り詈(ののし)りければ、せんすべなし[11]。是等も心なく打過(うちすご)しけるが故に、其(その)婆も如何(い かばかり)斗に恋しく思え候(さうら)えどもいたし方もなし。家は腐朽し、年は愈々老(いよいよおい)、身は衰え、今は一尾の魚とる事をもなり難く成り、また*アツシといへる蝦夷人の着るべき織もの等を紡績することも眼疎(うと)くなりて致し兼(かね)候まゝ、彼方(かなた)此方(こなた)より一尾の二尾の魚をうけ、往来の蝦夷人等が一撮(ひとつまみ)づゝの煙草、一椀づゝの米等を恵み投ずるに、漸々(やうやう)に活命(かつめい)し居(をり)たりしが、此(この)イシヤンといへる里も近年まで人家六七軒も有(あり)しに、追々其(おひおひその)*土人等も浜へ下(さげ)られ、今二軒ならで残らず、其(その)二軒も一軒は七十余歳の婆一人、一軒は六十五六歳の婆と十歳斗(ばかり)の娘の子のみにて暮しけるまゝ、其(それ)等といへども其(その)日其日の暮しに困り居りけるまゝ、日々の恵みも自然と疎くなり、今は一日の存命も其(その)里に居(をり)てはなり難くや思ひ初(そめ)けん、今年《巳のとし》四月の初(は)つ比(ごろ)とやら家を捨(すて)て、只一人鍋一枚と鉞一梃(まさかりいつちやう)を携(たづさ)え、ひそかに山へ入(い)りて象山貝母(うばゆり)[12]といへるものやまた延胡索(トマ)[13]といへるもの等を掘(ほり)、またはニヲ[14]、シヤク[15]等云(いふ)

8　場所のうち海岸沿いの地で、特に運上屋や番屋が置かれているところを指す。

9　「長年の間」の意。

10　振り仮名は世界本に拠る。

11　底本は「せんすべし」。石水本に従う。

12　象貝母とも。アイヌ語名トレフ turep というユリ科の植物で、根茎を食用。北海道に自生する品種はオオウバユリともエゾウバユリともいう。

13　和名エンゴサクまたエゾエンゴサク。アイヌ語名トマ toma というケシ科の植物で、塊茎を食用。

ものゝ茎等を取りて生命を繋ぎ、それ等の枯果る時は己れもともに死せんと思ひ窮め、深山へ分け入、彼ウリウ[16]といへる方へ越て、此処に大なる木の根もと朽て穴の有りけるが聊か膝を容るゝに宜しくなり居たりし由にて、是を住家となして、日々其辺り此辺りに彼草の根を掘、また茎を折て雨の日の貯・えと干居たるに、また

上カバタ[17]といへる処、此下に有、其処の土人イリモといへる者の妻ヤエレシカレ[18]と云もの当年二十九歳なるが、両三年前までは美面宜敷くして頗る艶色[19]有りしとかや。依てある番人其ものに[20]無理なる恋を言懸て、是をかなへずば夫イリモを辛き目見せん等と責叱りしまゝ、終に其言に落て密に承知をぞ致したりければ、纔に一度か二度のことなるべしと思ひしに、左候や夫イリモをヲタルナイ[21]といへる場所へ遣して情なくも其中を隔て、己が自由となし置しが、其番人は数年黴毒を患ひて居りし由、其黴毒に女の子は染伝して聊か病るや、番人は其より中うとくなりて通ひ[22]もせず[23]、一椀の米をも

---

[14] 和名エゾニュウ、アイヌ語名 cihue のこと。二、三メートルにもなるセリ科の植物で、茎を食用。

[15] 和名シャク、ハナウドとも。アイヌ語名 pittok はセリ亜科の植物で、茎を食用。。

[16] 石狩川の支流の雨竜川の流域。

[17] 現・樺戸郡あたり。カバトとも。石狩場所は広大であったので、それを十三に区分（いわゆるイシカリ十三ヶ所）して治めたが、上カバタ、下カバタはその二区であった。

[18] 底本は「ヤエレシカ」。章の見出しに従う。松浦武四郎選集（4、175）所収の「上カバタ人別帳」に「イリモ　家なし　52 才、妻ヤエレシカ　瘡　29 才　《リコチウシ母と二人ウリウへ行候也　家なし　病人也》」とある。なおイリモ　に「ハ」つまり「浜」という記号がある。

[19] 非常に色っぽく、あでやかな顔つき。

[20] 自筆本は「に」なし。道庁本に従う。

[21] 小樽内川流域にあった場所。現・小樽市あたり。

[22] 底本は「通路も」。石水本に従う。

不与、一服の薬をも遣はさず、終に見離し侯まゝ、誰一人も其日其日の喰を与ふるもの無して、只一人*雇ぐらと云るに其侭伏さし置有しが、一匕の飯も一口の菜も無りせば、今さら餓死すも心なくや思ひけん、此方彼方より生魚をもらひ来り、是を喰し居るに、いよいよ日まし月ましに病重くなり、鼻落前部爛れ、今は身体も余程腐れしかば、身も[24]人の目を恥らひ山へ入らんと雇ぐらを立出て、上川[25]へ上る船々の有るに便を乞て[26]出立来りしが、今は上カバタといへるに家もなく、身をよする処も無が故に、上川まで上りて因の家へ行、*介抱を請ましと思ひしに、此姿にては故郷へも返り難く因の者等へも[27]逢がたしと思ひ直して、此ウリウブト[28]といへる処より少し下なるユウベウツ[29]といへる大なる深淵が有けるが、此ユウベウツといへるは潜龍鯊[30]が常に住けると云る処なるに身を投ぜんとせしを、同船の者等取押えて其故由を聞かば、此姿[31]と成て故郷へ帰り行も口惜し、依て此深潭へ身を投じなば[32]と答しまゝ、左も有べけれども命こそ物の種なれ[33]、一度死せしかば如何とも致しがたし、また

---

[23] 自筆本は「せせす」。道庁本に従う。

[24] 自分自身も

[25] 石狩川上流、神居古潭（かむいこたん）より東、現在の旭川周辺の上川盆地を指す。

[26] ついでにいっしょに乗せてくれるよう願って。

[27] 底本は「因の者の方えも」。石水本に従う。

[28] 雨竜川が石狩川に合流するところ。現・雨竜町内。

[29] 底本はユウベウツカ、ユウベウツと異同があるが、ユウベウツに統一。石狩川東岸の地名。現・滝川町内の江部乙（エベオツ）にあたるか。『丁巳日誌』（上、231）にこの深淵の記述があり、ユウベヲツナイとある。

[30] 鮫に似た大きな淡水魚（約 1.5 メートル）で、明治期まで石狩川や天塩川に生息していた。

[31] 自筆本は「婆」。道庁本に従う。

[32] この深い淵に身投げしたならすべての苦しみから解放されるでしょう。

[33] 何事も命があっての上のことであるの意。「命あっての物種」とも。

此病とても癒ること無とも極めがたしとさまざますかし寛宥て、漸々のことにて命を全うせさし、ウリウブトといへるへ船を寄せて宿せし処、其少し斗奥に一縷の煙の見ゆる侭、是へ其舟子ども尋行見しが、彼ヤエコエレ婆一人居しまゝ、此度ヤエレシカレといへるものをも連来り侍りしに、かゝる次第にて上川へも行ことを忌らひしかば、共に此処にて住し給えかしと頼、連立行て形ち斗の亭盧[34]を作り相与えて、喰料等配ち置しとかや。依て此者等二人程此処にて住しける処へまた、

ウリウの土人なるが、名はヒシルエ[35]といへる当年七十一歳なりけるが、夫に早く分れしが、二人の男子有しまゝ、兄なるリコチウシといへる当年三十三歳なるには、ウレシユノ[36]といへる妻を娶り、弟のイコチウシ[37]と云るには当年三十歳なりけるが、未だ妻をも持たさず置しかば、其三人を便りに暮しける処、運上屋より此三人の者を引取りて少しも山へは帰さずして遣ふまゝ、今は家も朽果て形も無なり、身は老て腰も二重となり、身体老労れ衰えて漁どりも出来兼候まゝ、只餓死せんより致し方なしと、其ウリウを立出て、是も鍋一枚と鉞一梃をもち、草の根またはニヲ、シヤク等の類を掘取り喰し、辛うじて存命し、今一度リコチウシ、イコチウシに逢ふて運上屋の所置を恨怨み言遺し置かましと此ウリウブトまで出来り、往来の船もあらば浜へ便を致し、是非逃去りてなりとも一先帰り来り候様にとの言伝えせましと見しに、此ヤエコエレ婆にヤエレシカレ女の子と二人、形斗の小屋に入て日々草の根、草の茎に命を繋ぎ、其草の枯果るまでの命と覚悟の話しを致し、死さばその支配人や番人てふもの

---

34 挿絵に拠れば、柳の枝様のもので骨組みを組み、フキの葉で覆った半円形の小屋。

35 名前は「ヒシルエ」、「ヒシルイ」と異同があるが、章の見出しに従う。

36 自筆本は「ウレシユノ」、「ウシンテ」、「ウレシテ」などとも読まれているが、「ウレシユノ」に統一。

37 名前にイコツチウシ、イコチユシ、イコチウシなど異同があるが、「イコチウシ」に統一。

へ此怨魂を通さましと語りしに、同意致し、左も有なば我も此処にて来る秋をぞ待ち、千草の枯果るを一期[38]と命を露とあきらめしぞ、いと愛憐なることなりけり。左聞より余も此処へ船[39]をよせて上りの時に尋しが見当らざりしかば[40]、心なく過しに、帰るさにまた船を寄せて探し求めしかば、欵冬[41]の葉にて作れる小屋に三人が居たりしが、最早ヤエレシカレは身体半腐爛し居て[42]其辺りに近よるも臭気に堪がたかりし。我も此者へ米、煙草、針等を配ち与えて帰りしが、其ヤエコエレの怨魂や鬼神も憐れと思召せしか[43]、其難渋堀鎮台[44]の聞に達しけるまゝ、若干の玄米等を彼の妹娘シトルンカを呼出し自から賜はり、猶此者等を一度山へかへし老を養はせよと、恭なき仰ごとまで有りしぞ、有難しとも尊ふとしとも言はかりがたくぞ覚ける。

---

[38] 一期は一生の意であるが、ここでは一生の終わり、最期の意で用いられている。

[39] 自筆本は「寄」か。後出の「船を寄せて」の「寄」と同じ字。道庁本に従う。

[40] 武四郎が往路、案内人をしてヤエコエレたちを探させたが果たさず、帰路には尋ね当てて事情を聴いたことは『丁巳日誌』（上、218-219、337-339）に詳述されている。

[41] 北海道に自生する蕗。茎の長さが 2 メートル、葉が直径 1.5 メートルにもなる非常に大きな品種で、仮小屋などをつくるのにつかう。

[42] 底本は「腐れし居て」。石水本に従う。

[43] おにがみもかわいそうだと思われたのであろうか。「鬼神」は超人的な力をもつ神。

[44] 堀利熙（1818－1860）。「鎮台」とは遠国奉行（ここでは箱館奉行）を中国風に呼んだ名称。通称織部。安政元年（1854）から箱館奉行に就任し、安政四年に蝦夷地一円を廻浦。本文の話はこの時のもの。堀は安政五年新設の外国奉行に就任、幕末の中心的な外交政治家として活躍。